＜考察＞

家族の形態は社会の変化とともにその時代に沿って変容していく。戦前、戦後、現代と家族の形態を見ると明らかに変容している。現代における家族の形態は個人の考え方によって様々な家族形態を選択できるようになってきた。以前は性別役割分業型の核家族が最良のものと考えられていた。しかし、現代においては結婚して子どもをもうけないという選択も選択肢の一つとしてとらえられる。

具体的には以前は、女性は一定の年齢になったら結婚し男性は結婚をし、家庭を持つことによって一人前だという世間の一般的であった。

つまり世間の枠組みにとらわれることなく個人に焦点があてられ、個人の意思が尊重されるようになった。

このように家族形態の変化は時代とともに進み、それに伴い常識や世間も変化する。

だが、家族の形態は変容していくが、家族の存在は精神的に満たされ、心の支えとしての役割は存続すると考えられる。

＜要約＞

所得水準の向上、都市化、産業構造の変化、高学歴化といった社会・経済状況の変化に伴い

家族の形態や地域コミュニティが変化している。具体的には家族形態の変化としては核家族化や少子化、離婚の増加、女性就労の増加などが挙げられる。また、地域コミュニティの変化としては地域コミュニティの過疎化、子ども遊び場、自然の減少などが挙げられる。

こうした家族形態の変化や地域コミュニティの変化は家庭の質の変化をもたらした。子どもは生活時間や遊びの変化、ストレスの増加とストレス耐性の低下、非行、校内・家庭内暴力、いじめ、不登校等の増加といった傾向がみられる。同様に親も育児不安、自身の喪失、育児伝承の欠如、父親の存在感の希薄化、母親の育児専業からの離脱といった傾向がみられる。様々な変化により子どもや親、子育てのニーズも変化している。そうしたニーズの変容を常に把握しておく必要がある。保育所不足や保育時間の延長、乳児保育などがニーズ増加傾向にある。